

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370162

研究課題名(和文)17世紀の鍵盤音楽における分割鍵盤使用の可能性～中全音律による演奏法の研究～

研究課題名(英文)the possibility of using the keyboard instruments with split-keys (divided-accidentals) in playing the keyboard music in the 17th century

研究代表者

大塚 直哉 (Otsuka, Naoya)

東京藝術大学・音楽学部・准教授

研究者番号：70625847

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：現代にわずかに残る「分割鍵盤を備えた鍵盤楽器(チェンバロやオルガン)」の試奏を通じ、通常の「音律」では平板に響いてしまうことの多い17世紀の鍵盤作品群が、分割鍵盤楽器の使用によって中全音律本来の特質を生かしながら魅力的に演奏できること、またいくつかの楽曲については分割鍵盤楽器に触れなければ本来の意図が理解しがたいことが明らかになった。分割鍵盤楽器を知ってもらうためのレクチャーコンサート、及び東京藝術大学のチェンバロ専攻で学ぶ学生たちが実際に分割鍵盤チェンバロを演奏する勉強会やマスタークラスなどを行い、分割鍵盤楽器への興味を喚起するとともに、将来日本の教育機関に導入するための仕様を検討した。

研究成果の概要(英文)：(1) To visit and play the survived split-keyed instruments, as well as modern replicas gives us the conviction that playing the 17th century's repertoire in meantone temperament with those divided accidentals makes those repertoire sound with essential charms, which is often missing in the modified temperaments. (2) To research the cases that those split-keyed instruments are used today, particularly at the case with the educational institutions like Conservatory van Amsterdam, Goteborg University gives us the view for the future plan to purchase those instruments and give the younger generations the opportunity to study on those instruments. (3) We gave a lecture-concert with the split-keyed harpsichord (built by Mokuzan Kayano as a trial), and the split-keyed positiv organ (built by Marc Garnier) in March 2015, and the students concerts with the split-keyed harpsichord (by Kayano) in July and November 2016, as well as the masterclass by Prof. Jos van Immerseel in March 2016.

研究分野：音楽(チェンバロ、オルガンの演奏)

キーワード：チェンバロ オルガン 西洋古楽 中全音律(ミーントーン) 鍵盤音楽 分割鍵盤

1. 研究開始当初の背景

西洋の鍵盤音楽、とくにバロック時代の鍵盤音楽演奏の実践的研究において、18世紀のレパートリーについては、使用楽器、調律法と奏法の関係についてそれなりの進展が見られるものの、中全音律での演奏が前提となる17世紀のレパートリーに関しては、実践上の困難さからその研究が遅れていた。そこで今回は特に17世紀の鍵盤音楽を演奏する際に使われていたと考えられているものの現代ではほとんど実践されない「分割鍵盤を持つ鍵盤楽器(以下分割鍵盤楽器)」の使用に着目し、それによって17世紀の鍵盤音楽を、中全音律を用いてより魅力的に演奏する方法を研究することとした。

2. 研究の目的

(1) いわゆる初期バロック期の鍵盤音楽(オルガン作品、チェンバロ作品)の演奏法研究の一環として、当時広く行われていた長3度が純正となる独特の調律法である「中全音律」による演奏法の研究を行う。とくに当時の鍵盤楽器のいくつかに見られる「分割鍵盤(split-key, divided-accidental key)」が、中全音律におけるより遠隔の和音を使用する可能性を拓げるものであることに注目し、その実態を残存楽器や資料から調査し、また試奏を通じて実際の演奏における使用法を考察する。

(2) この、当該分野の専攻学生にとってすら触れる機会のほとんどない「分割鍵盤楽器」の魅力や、一般向けの「レクチャーコンサート」や、専攻学生を対象とした勉強会・マスタークラスを通じて啓蒙し、分割鍵盤や中全音律を用いた演奏について広く興味を喚起する。

(3) このような分割鍵盤をもつチェンバロやオルガンを日本の教育現場に導入し、興味のある学生がアクセスできる環境を作るためのプランを作る。

3. 研究の方法

(1) ヨーロッパの歴史的な残存楽器(ポーランドの聖ペテロ教会の分割鍵盤オルガンほか)を訪問し、見学・試奏を通じて、その実態や演奏法の研究を行う。

(2) 現代における復元された分割鍵盤楽器の試奏、およびその製作者や研究者との意見交換を通じて、日本の教育機関へこのような楽器を導入する際の仕様について検討する。また、ヨーロッパの教育機関で分割鍵盤楽器を導入して、専門家教育を行っている機関

(スウェーデンのイエーテボリ大学、オランダのアムステルダム音楽院など)での様子をヒアリングする。

(3) 日本の製作者が試作した分割鍵盤チェンバロを借用し、17世紀の鍵盤音楽を演奏する「レクチャーコンサート」や専攻生対象の「勉強会」を開催し、聴衆にとっても奏者にとっても機会の少ないこの種の楽器に触れる機会を作る。

(4) これらの研究の諸要素の準備のために、基礎的な文献の講読、視察の報告会、意見交換を行う「分割鍵盤研究会」を随時開催する。

4. 研究成果

(1) 5回の視察旅行での視察・試奏を通じて、充実した作品群でありながら、通常の「音律」では平板に響いてしまうことの多い17世紀の鍵盤作品群が、「分割鍵盤を備えた鍵盤楽器(チェンバロやオルガン)」を使用することによりより中全音律本来の特質を生かしながら魅力的に演奏できること、またいくつかの楽曲については、分割鍵盤楽器にさわってみなければ本来の意図が理解しがたいことが明らかになった。たとえば比較的よく演奏されるレパートリーの一つである、J.P.スウェーリンクの《半音階的幻想曲 Fantasia Cromatica》の場合、間隔の均等でない中全音律独特の半音階進行が主要主題として用いられており、12等分律(いわゆる平均律)はもちろん、18世紀の不等分律でもその強烈さは体験できない。ところが、楽曲中にレ#とミbが登場するために、分割鍵盤のない楽器ではなんらかの妥協を迫られることになり、実際には不等分律で演奏されることが多い。これらのことは、たとえばJ.J.フローベルガーのいくつかの《聖体奉挙のトッカータ Toccata per Elevatione》などにもあてはまり、なかなかその楽曲本来の魅力が伝わりにくい。興味深いのは、一度この分割鍵盤オルガンやチェンバロで、この本来のでこぼした半音階を体験すると、そうでない調律法の楽器で弾く際にも、その強烈さを求める耳の欲求が生じ、それがアーティキュレーションやタッチの変化として表れることが複数の奏者で観察された。これは17世紀の鍵盤音楽を「生ぬるく」演奏せず、「生き生きと」演奏する、という当初の目的からしても重要な発見である。

(2) 中全音律による鍵盤楽器が現代でも使われていて充実した成果を挙げているいくつかの例、また特に教育機関に導入されている例(オランダのアムステルダム音楽院、スウェーデンのイエーテボリ大学)から多くの今後への示唆を得た。このような分割鍵盤楽器は現代においてはそれほど意義がない、と

考える奏者や研究者もいるが、決してそうではなく、多くの可能性を持つことがわかった。すなわち、現在チェンバロやオルガン演奏の領域で主要レパートリーとなりつつある17世紀の鍵盤音楽の理解にはかなり本質的な役割を果たすと考えられる。特に若い世代の奏者ほど、先入観なくこのような楽器での演奏に慣れ親しみ、中全音律独特の魅力や奏法を楽器を通じて自然に学び、楽曲にもともと備わっていた輝きを身体に取り込んでゆく姿が見られた。

(3) 現代において分割鍵盤楽器の製作にかかわっている研究者・製作者(Denzil Wraight氏、横田宗隆氏ら)とのワークショップやディスカッションでは、かつての鍵盤楽器製作の高い技術のいくつかは現代において復元されきっておらず、この分野でまだまだいろいろな可能性があるが、その筆頭ともいえるもののひとつがこの分割鍵盤であることが明らかになった。なかでもオルガンの場合には、分割鍵盤を通じて実現できるより純正な長3度が、「ミクスチャー」や「コルネ」などの名称でまとめられている複合ストップ(オルガンの音色を選択するもの)の中の純正3度と共鳴する響きの良さがどうしてもそれ以外の方法では実現しがたい重要なものであることがよくわかった。

(4) この分割鍵盤楽器を多くの人に知ってもらうための活動として、日本人製作者のかやの木山氏が試作した分割鍵盤つきチェンバロ(C/Eのショートオクターヴ、dis/es, gis/as, ais/b)や、ガルニエ社製作の分割鍵盤つきポジティブオルガンを用いての、一般の人を対象としたレクチャーコンサート(平成27年3月)を開催し、40名ほどの聴衆を前に、3名の奏者(大塚、佐藤、土居)が17世紀のレパートリーを演奏した。終了後は楽器見学や試奏の時間も設けた。また、東京藝術大学のチェンバロ専攻で学ぶ学生たちのために、実際に分割鍵盤チェンバロ(かやの木山氏製作)を演奏する勉強会(平成28年7月「モンテヴェルディのポッペアの戴冠」、11月「中全音律のレパートリー勉強会」)を行った。前者においては中全音律を用いたアンサンブルの中の通奏低音の演奏において、分割鍵盤がとても大きな力を発揮すること、また同時に奏法にはかなり注意が必要であることがわかった。また後者においてはソロのレパートリーにおいて実際に分割鍵盤での演奏を学生たちが体験し、戸惑いながらも、あらためて自分が「普通」だと感じていた奏法を見直すよい機会となった。さらに、分割鍵盤楽器を用いた演奏に造詣の深いJos van Immerseel氏のワークショップ(平成28年3月)を行い、経験豊かなvan Immerseel氏から学生がさまざまな有益なアドヴァイスを得た。これら一連のワークショップ等を通じて分割鍵盤が持つ将来の世代への大きな可

能性を認識することとなった。

(5) これらの研究、意見交換を経て、東京藝術大学に導入する分割鍵盤チェンバロの仕様を策定し、将来の予算獲得・発注に備えることとなった。また専門生教育におけるこの楽器を用いたカリキュラム案を作成した

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大塚 直哉 (OTSUKA, Naoya)
東京藝術大学・音楽学部・准教授
研究者番号：70625847

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：

(4)研究協力者

- ・ 佐藤 賀乃子 (SATO, Kanoko)
- ・ 土居 瑞穂 (DOI, Mizuho)
- ・ 横田 宗隆 (YOKOTA, Munetaka)